

山形のふるさと工芸 おい たま つむぎ -経済産業大臣指定伝統的工芸品- **置賜紬**

米沢、長井、白鷹の各地で生まれた
高度な染めと織りの技術「置賜紬」

国の伝統的工芸品に指定されている「置賜(おいたま)紬」は、米沢・長井・白鷹に伝わる紬の総称です。それぞれの地で別々に発展した紬を、ひとつの名称に統合した経緯をふり返ります。

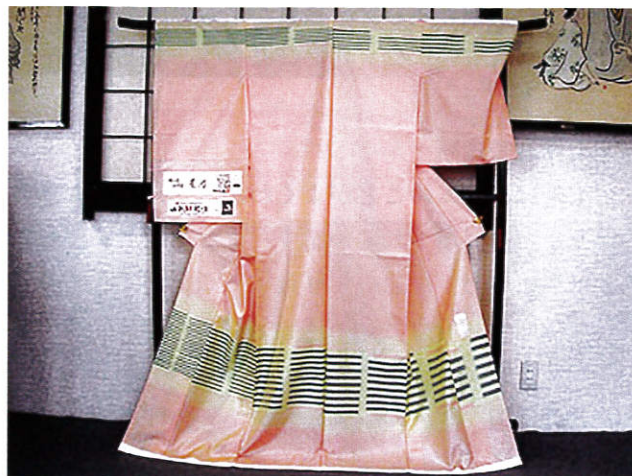


青苧から絹織物産地へ転換した米沢藩

置賜地方の米沢・長井・白鷹近郊は、江戸時代初頭から、織物の原料となる青苧(あおそ)を栽培して越後方面に出荷する原料生産地でした。江戸後期の米沢藩第9代藩主上杉鷹山の時代になると、自給自足の織物産地を目指して、青苧を使った織物づくりを開始。肌になじむ麻織物を作るため、越後から職人を招き、縮織(ちぢれおり)の研究を行いました。凶作によって青苧織を中断した後は、領内に桑を植え、養蚕を奨励し、「絹織物生産」へと方向転換します。

米沢、長井、白鷹で生まれた高度な緋の技術

米沢藩の絹織物は、本場・京都から織物師を招いて研究開発したために飛躍的に発展。紅花や藍、紫根(しこん)などの植物染料で糸を染めて織る先染めの技術を確立します。その一方で、養蚕地だった長井・白鷹でも織りをするようになり、明治期に入ると新潟などの先進地から技術者を招き、高度な緋(かすり)技術を開発。大正期から昭和はじめにかけて、長井紬の「米琉(よねりゅう)緋」や白鷹紬の「板縮小緋(いたじめこがすり)」が全国に知れ渡るようになりました。



山形県産の最高級「最上紅」を自分たちで栽培し、糸を染め、織る、「山形紅花染」の置賜紬。古くから伝わる草木染技術や織り技術と合わさって、多彩な表情を見せてくれます。



時代の中で変わりゆく産地の姿

全国有数の絹織物産地に成長した置賜地域も、戦中・戦後を経て、大きく変化しました。素材は化学繊維や輸入品へ、織り技術も機械化へ。その一方で、昔ながらの草木染を手織りで行う染織家が米沢・長井・白鷹、各地に存在していました。昭和49(1974)年、国が伝統的工芸品を保護する「伝産法」を交付したことをきっかけに、そうした紬を「置賜紬」と名付け、保護、発展させようという動きが起ります。

国の伝統的工芸品「置賜紬」へ

米沢、長井、白鷹の各織物組合は、具体的にどの紬を置賜紬に指定するか検討しました。そして選ばれたのが、米沢織の「草木染」、長井紬の「緯総(よこそう)緋・経緯併用(たてよこへいよう)緋」、白鷹紬の「板縮小緋」です。同時に、その技術を持つ12社が集まり、新たに置賜紬伝統織物協同組合を発足。昭和51(1976)年、それぞれの地で発展した伝統紬は「置賜紬」として、国の伝統的工芸品指定を受けるに至りました。

山形県ホームページ〈山形県ふるさと工芸品〉より

教育用品通販 CATALOG

UCHIDAS
ウチダス

教育現場の必需品とりそろえ
約 **19,500** アイテム!!

送料無料
翌日お届け

FAX締切時間

PM5:00

インターネットショップ
締切時間PM5:30

とっても便利!

カタログのご請求は山形教育用品営業担当まで